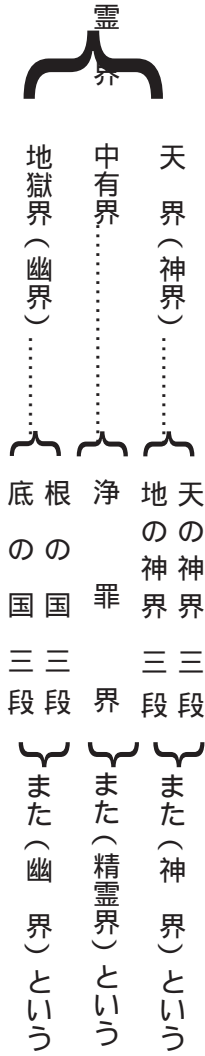


第五章 霊界の修業(行) (五)

霊界には天界(神界)と、地獄界と(幽界)、中有界と(三大境界)(二大境界)がある。天界(神界)は正しき神々や正しき人々の靈魂の安住する国であり、(安住所である)。(地獄界(幽界)は邪神の集まる国(所)であり、罪悪者(悪罪者の靈魂)の墮ちてゆく(国(所)である。そして天界(神界)は至善、至美、至明、至樂の神境で、天の神界、地の神界に別れており、天の神界にも地の神界にも、各自三段の区劃が定まり居り、上中下の三段の御魂が、(の)それぞれに鎮まる樂園である。地獄界(幽界)も根の国、底の国にわかれ、各自三段に区劃され、罪の軽重、大小によりて、それぞれに墮ちて(落とされて)ゆく至悪、至醜、至寒、至苦の刑域である。今自分(王仁)はここに霊界(神界)の御許しを得て、天界、地獄界など(神幽兩界)の大要を表示して見よう。



至善・至美・至明・至樂の神境……この上もなく能く、美しく、明るく、楽しい天の境域。

至悪・至醜・至寒・至苦の刑域……いかにも悪く、醜く、寒く、苦しい幽界(地獄)の刑域。

霊界の大要は大略前記のとおりであるが、自分(王仁)は芙蓉仙人の先導にて、霊界(幽界)探険の途に上ることとなった。勿論身は高熊山に端坐して、ただ霊魂のみが往つたのである。

行くこと数百千里、空中飛行船以上の大速度で、足も地につかず、ほとんど十分ばかり進行をつづけたと思つと、たちまち(そこに)芙蓉仙人は立留(立留)まって自分(王仁)を顧み、

『いよいよ是からが霊界(幽界)の関門である』

といつて、大変な大きな河の辺に立った。一寸見たところでは非常に深いようであるが、渡つて見ると余り深くはない。(が)不思議にも自分の着ていた紺衣は、水に洗われたのか忽ち純白に変じた(のである)。別に衣服の一端をも水に浸したとも思わぬに、肩先まで全部が清白になった(のである)。芙蓉仙人とともに、名も知らぬこの大河を対岸へ渡りきり、水瀬を眺めると不思議にも水の流れと思つたのは誤りか(で)、大蛇(の群)が幾百万とも限りなきほど集まって、各自(各自)に頭をもたげ、火焰の舌を吐いておるのには驚かされた(のである)。それから次々に涉りきたる数多の旅人らしきものが、いずれも皆大河と思つたと見えて、自分(王仁)の涉つたように、各自に裾を捲きあげておる(のである)。そして不思議なことには各自の衣服が種々の色に変化することであつた。あるいは黒に、あるいは

は黄色きいろに茶褐ちやくしやく色いろに、その他雑多たざつたの色いろに忽然こつぜんとして変かわつてくるのを、どこともなく、五六人ごろくにんの恐こわい顔かあをした男おとこが、一々いちいち姓名せいめいを呼よびとめて、一人々々ひとりひとりに切符きっぷのよようなものをその衣服いふくに附つけてやる。そして速はやく立たてよよと促つなす。旅人たびびとは各自てんで（各自めんめ）に前方ぜんぽうに向むかつて歩ほを進すすめ、一里いちりばかりも進すすんだと思おもう所ところに、一ひとつの役所やくしよのよようなものが建たつてあつた。その中なかから四五しごの番卒ばんそつが現あらわれて、その切符きっぷを剥はぎとり、衣服いふく（衣物いぶく）の変色へんしやくの模様もようによつて、上衣うわぎを一枚いちまい脱ぬ（脱ぬ）ぎとるもあり、或あるは二枚にまい（三枚さんまい）と脱ぬぎ取とられ下衣したぎ一枚まい（にしられるもあり、丸裸まるはだかにしられるものもある。また一枚いちまいも脱ぬ（脱ぬ）ぎとらずに、他の旅人たびびとから取とつた衣物きものを、或あるは一枚いちまい、あるいは二枚にまい三枚さんまい、中なかには七八枚しちはちまいも被きせられて苦くしそうにして出でてゆくものもある。一人々々ひとりひとりに番卒ばんそつが付つき添そい、各自かくじ規定きていの場所ばしょへ送おくられて行くのを見みた（であつた）。